

わたしにとって日本語教育とは何か

「アイデンティティ」の模索に終わりはない

入学前レポート「私にとって日本語教育とは何か」から

宮口さや子

1. 動機

日本語教育の世界に入って5年が過ぎた。この間に、「わたしにとって日本語教育とは何か」は徐々に変化してきた。この変化は自分自身の変化でもある。私自身が変化してきた過程を踏まえて、現在の「わたしにとって日本語教育とは何か」を考えてみたい。

日本語教師の卵として、実際に教え始めた頃は、無我夢中でひたすら「教えることとは何か」を考えていた。当時の私には、「わたしにとって日本語教育とは何か」を考える余裕はなかった、というよりは疑問すら湧かなかった。教室では、文法学習を中心とした日本語教育をしており、私の頭の中は文法や教科書のことでいっぱいだった。しかし、しばらくすると、学習者が求めているものと、自分が与えられるものとのギャップに気づき、自分は何のために、何を教えているのかわからなくなってきた。自己実現のためなのか、自己満足のためなのか、はたまた経済的なもののためだけなのか。日本語教育と私との関わり方を初めて意識するようになった。

そんな折、海外で日本語を教える機会を得た。私は青年海外協力隊という国際協力事業の一環として派遣されていたので、国際協力における日本語教育というものを意識するようになった。今日の国際協力の世界では、従来の「ものや技術の協力」だけではなく「人と人との協力関係」が求められている。私はこの2年間の経験から、日本語教育の世界についても、同じことが言えるのではないかと考えるようになった。「言語能力を伸ばすという技術の協力」だけではなく、「人と人との交流」が求められていると感じたからである。というのは、私は大学で日本語を教えたが、彼らは、ことばの言語能力以上に、そのことばを使用する「人」や「人を取り囲む社会・文化」に興味を持っていた。またその認識を深めることで、彼ら自身も変化していた。ことばを学ぶことを通じて、そのことばの世界に触れただけではなく、アイデンティティへの気づきを促し、自分自身の世界にも改めて触れたのである。同時に私自身も、日本語を教える中で、自分自身のアイデンティティへの気

づきとその変容の楽しさを感じた。彼らと交流するうちに、自分自身も変化していたのである。

帰国後、私は大学院進学を決意した。「アイデンティティの気づき・変容」が言語習得過程に与える影響を学問的に研究をしたいという思いが強くなったためである。これまで漠然としていた自分自身の日本語教育への関わり方を、研究を進めることによって見つめ直すためでもある。率直に言って、「私にとって、日本語教育とは何か」はまだはっきりしない。しかし、これまでの経験から、漠然とだが、少し見えてきたものがある。

学習者も、教師も、ことばを学ぶという過程を通じて、新しい自分に出会い、変化するということである。そう考えると、今私にとって、日本語教育とは、「人と人との交流によって常に変化する新しい自分に出会う場である」と言えるのかもしれない。

2. 対話

2.1. 対話相手

対話相手を選ぶにあたっては、2つの選択肢を考えた。日本語教育の関係者と、日本語教育関係者以外である。前者を選んだ場合、共有の知識や背景があることから、対話にスムーズに入れることが予想される。一方、後者を選んだ場合、日本語教育の全般に対する補足が必要であるが、対話内容は日本語教育の範囲に限られることなく、広がりをもつ可能性がある。更に、日本語教育とは全く違った分野からの新しい視点は、今回のレポート作成に大きな刺激を与えてくれるだろうと予想できる。よって、後者を対話相手として選ぶことにした。対話相手は、私が以前青年海外協力隊としてタイで日本語を教えていた時期に、同じく青年海外協力隊としてタイでコンピューターを教えていた友人である。専門は違うが、海外で人に教えるという経験をしていること、海外で自らが語学学習経験があるということから、本レポートの対話の相手として選んだ。

2.2. 対話内容

対話は、友人に動機文を読んでもらった後、興味をもった点や気になった点などをお互いに質問し合う形式で行った。その中から、印象に残った対話内容を、以下の4つにまとめた。尚、対話では、M（筆者）、Y（友人）と表記する。

1) 国際協力事業に参加したことについて

Y: レポートには、「言語能力を伸ばす技術の協力」だけでなく、「人と人との交流」が求められているとあって書いてたけど。国際協力における日本語教育について、どんな風に考え方が変わったの？

M: 学習者にとって、初めて出会う日本人が私なわけで、その責任の重大さに気づいた。私が国の代表みたくなっちゃう。時として私の言動や考え方が代表になっちゃう怖さを知った。

Y: 日本人ってのは、こういう人なんだって思われちゃう？

M: ほんとは時間などをかけて、いろんな日本人に出会って、いろんな日本に触れる機会があればいいんだけど、それは海外では無理でしょ。学習者も、私一人が日本じゃないってわかってるんだけど、やっぱり最初の印象とあって強いよね。

Y: それはあるね。日本人に対するステレオタイプがあって、「お前はそうじゃないじゃないか」とか「やっぱりそうなんだ」とかってのもあるよね。

M: そう。そのたびに日本人にもいろいろあって、日本ってのも今見えてるのは一部なんだよって言ってるけど、やはり学習者は私というフィルターを通して、日本語を勉強して日本を見てるわけだから。でも、私っていう個人をなくして、一般論みたいなものを語ろうとすると、無理がある。

Y: 言動や考え方が代表になっちゃうことで、何か言動変わった？

M: 私はこう思うし、こう考えるけど、違うように考える人もいるよって付け加えたりした。でも、必ず一般論だけではなく、私の意見も言うようにした。学習者にとって、目の前の、自分と関わり合いのある人が、どう考えてるかってやっぱり知りたいことだと思うから。

Y: 一般論みたいなものを語ろうとすると、無理があるってのはどういうこと？

M: 一般論はあくまで一般論で、個人が見えてこないのよ。個人が個人を語るなきゃ。でも今度はそれが代表になっちゃう危険性が出てくる。

Y: 国際協力として行ったら、日本の代表みたくなるわけでしょ。けど、それでも全て個人として語るってこと？

M: そだね。そこが難しいところ。

Y: バランス？個人と代表（言ってみれば公人）の。

M: そもそも、国際協力の中の日本語教育って、未来の日本とのよき関係作りみたいな役割を担ってるわけでしょ？

Y: やっぱり日本の代表なんだ。協力隊員ってのは特にそうかも。

M: 日本を理解してもらおう、とか、もっと理解を深めるために若者を送り込もうとかね。でも、それ以外にも、新しい言語に触れることで、自分の国の言語について改めて考え直したり、新しい発見をしたりっていう自分の成長にもつながると思うの。少なくとも私は、親日家を増やそうと思って、日本語を教えてるんじゃないくて、お互いに違うものに触れてお互いに学び合うよって感じで、教えてた。

日本語教師をしていると、教師個人の意見や考えが日本人全般のそれととられる場合がある。特に海外では、顕著である。また、国際協力事業においては、国と国の政治的経済的関係を配慮するため、個人が見えにくくなってしまふ。しかし、国際協力事業にこそ、個人と個人の「顔の見える」協力が必要なのではないだろうか。

私はタイの大学で日本語を教えていたが、彼らは、学習段階において、「ことば」の言語能力以上に、その「ことば」を使用する「人」に興味を持っているように感じた。「ことば」は日本という国や日本人について知る一つのツールであって、決してゴールではないのである。「ことば」というツールだけを教えるのではなく、「ことば」を媒介にして「人」と「人」が相互交流すること、それが国際協力における日本語教育の役割だと考えるようになった。その「人」というものは、国を代表するというよりは、国の一員として発言や行動に責任を負いつつも、自由なものでありたいと思う。

海外に出ると、日本国内では考えてもみなかったことを考える機会がある。「日本」って? 「日本人」って? 「日本人である私」って? そもそも「私」って? というアイデンティティへの問いとも言うべき問いが否応無しに襲ってくる。国際協力という大きな看板を背負い、いざ外へ出てみると、自分の無力さや無知に気づき、丸裸にされた。しかし、丸裸であればこそ、良い協力関係を気づく第一歩なのであると確信できる。「あなたはだれ?」「わたしはだれ?」。国際交流の一つの形として、アイデンティティの交流があるのかもしれない。

2) 「アイデンティティ」について

M: 「アイデンティティ」って何だと思う? Yが考える「アイデンティティ」でいいんだけど。

Y: 自分自身。自分のルーツ（日本人だとか〇〇に生まれたとか）や性格、嗜好その他もろもろを合わせた自分。どこから来てどういう育ちでって。でも、

ひとことで言えば「自分自身」ってなるかな。

M: それって揺らいだり、わかんなくなったりしたことある？

Y: 大学までふらふらしてた。今もあるかもしれないけど、自分はダメだ～！って思ったりとか凹んだりとか。

M: 今は確固たる自分ってものがあるの？

Y: ないね。けど、昔のように過小評価はしなくなった。ゆらぎが少なくなったっていうのかな。

M: これからはどうなると思う？またゆらぐ？それとも？

Y: ものすごく凹むようなことがあればゆらぐかも。そうじゃなければ、過小でも過大でもなく、ゆらぎがなくなってくるのかな？Mにとっての「アイデンティティ」って？

M: 自分ってものを意識すること。普段は全然気にしてないの。自分ってものを。でも何かのきっかけで、自分を意識する。そのきっかけは何であってもいいと思う。

Y: 意識する自分自身ではなく、意識するって行為ってこと？

M: 自分自身かな？？行為かな？？

Y: 「アイデンティティの変容」ってのはどういう意味？

M: その行為によって、自分自身が変わること。だと思う。あれ？？わけわかんなくなってきた。。きつと、自分って固定されたものじゃなくて、常に、1分1秒ごとに変化してるんだと思う。普段は気づかないけど、何かのきっかけで、変わる瞬間を強く意識するんだと思う。それがアイデンティティ。

Y: ってことは、意識した自分ってこと？

M: う～ん。たぶん。

アイデンティティという大きな概念を自分の言葉で説明するのは難しい。しかし、ここで現在の私が考える「アイデンティティ」というものを少し整理してみた。

個人の「アイデンティティ」は元々、いくつもの要素が重なり合っているものと考えている。それらの要素とは、民族的要素であったり、社会的要素であったり、文化的要素であったりする。それらは複合的重層的に絡み合い、「アイデンティティ」を形成している。しかし、それは普段意識しておらず、あるきっかけによって、それまで無意識のものとなっていた要素を、他者との関係の中で、初めて意識化し、相対化する瞬間がある。自分のなかの他者性に目覚めたり、あるいは自分のなかの複数性に目覚めることによって、新しい自分が見えてくるのだ。新しい自分

だけではなく、自分の存在を根から深く考えることで、忘れかけていた元の自分を取り戻すこともあるかもしれない。つまり「アイデンティティ」とは一元的で固定された自分というのではなく、絶えず変化し続ける流動性のある意識化した自分であると考えられる。

「ことばをまなぶ」という行為は無意識の要素を意識化する、そのきっかけの一つであろう。「ことば」は単にコミュニケーションの道具として機能するばかりか、「ことば」を媒体として、「ことば」の使用者が「アイデンティティ」を認識し変容する機能をも果たすことができると考えられるからだ。

3) 「アイデンティティの気づき・その変容」について

M: アイデンティティの気づきとその変容を感じたことある?

Y: 何か新しいことをしたら、「あ、自分はこういうことができるんだ」とか「こういうリアクションを取るんだ」とか思うよね。そういうのも「アイデンティティの気づきと変容」って言えるかも。

M: 新しいことって、例えば?

Y: タイで初めて生活するとか、新しい仕事・職場になるとか。

M: 気づく瞬間や変わる瞬間ってわかるもの? それとも後になって分かるもの?

Y: 変わるのとは分からないけど、「あ、自分ってこういうことに感動するんだ」とかって気づくことはあるよね。

M: 普段は意識してない自分を意識する瞬間があるってこと?

Y: 何か新しいことをすると、そういう瞬間に出会うチャンスが多いってこと。

M: 例えば、タイへ行く前と、行った後、帰国後で変化ある? 新しい自分を発見したって感じある?

Y: いい意味でも悪い意味でも。まあどこでもそこそこ生きていけるなあとは思ったな。

M: ことばを学ぶ過程を通して、新しい自分に出会ったり、変化したりした経験はある?

Y: ことばを学ぶ過程というか、ことばを使って新しく何かをした時とか、新しい考えに出会った時かな。タイ語を初めて使った時に喜びを感じた自分とか、タイ語で話して、「あ〜、なるほどっ」って思ったりとか。使うのも「学ぶ過程」と考えたら、質問の答えとしては Yes だよな。机の上での勉強ではほとんどなかったかな。むしろ生活上で使ってる時、あったかも。

M: 具体的なエピソードなんてある?

Y: タイ人の同僚と話してて、「ほお〜、タイ人はこう考えるんだ〜日本人とは違うなあ」って思ったりとか。タイ語で話さないとわかんないでしょ。後、タイに初めて行った時、タイ語で話してみても何とか通じた時に、そこで「お〜、つうじる〜!!」って素直に喜べてる自分を発見した。

M: 前は素直に喜べなかったの？

Y: そんなに大して感動もないかなって。でもこんなにうれしく思うとは思ってなかったね。

Yの発言に、「ことばを学ぶ過程というより、ことばを使って新しく何かをした時や、新しい考えに出会った時に、新しい自分に出会ったり、変化する」とある。私はことばを学ぶ過程というものを、クラスの中での学習段階に限って考えていたので、Yの「ことばを使うのも『学ぶ過程』と考える」という発想は新鮮だった。確かに、自分の経験に照らし合わせてみると、同じことが言える。タイ到着初日、空港からホテルまでの送迎バスの運転手さんに自分のタイ語が通じた時に感じた喜びや、その時の自分の質問文や運転手さんの答えは今でも鮮明に覚えている。教室で学んだタイ語を実践で使ってみて初めて、自分のものになったという感覚が得られた。更に、私の場合は、タイという新しい世界に自分が初めて受け入れられたという喜びも感じた。つまり「学ぶ過程」とは、机上の段階に限らず、実践の段階も含めた全過程を指すのではないだろうか。実践の段階における人と人との相互行為の中で、初めて「学んだ」という実感を得ることができる。そして、そのような過程を通して、普段は意識していない自分に出会い、変化するのである。Yはそのような過程を通して「素直に喜べる自分を発見」したという。新しいことばを獲得し、他者と通じることに喜びを感じる自分という新しいアイデンティティに気づいたのである。「ことばを学ぶ」ことは自分を知る一つ的手段であると言えるかもしれない。

Y: Mは「アイデンティティの気づきとその変容」を感じたことはある？どんな時にどんな気づきがあった？

M: 教えてて、自分も新しいことを発見したりとか、新しい自分の一面が見れたりとか、学生と関わる中で、自分が変わってきてるのを感じた。なんとなくだけだね。

Y: 新しいことって？

M: 学生の反応から、こんな教材や内容が興味あるんだとか、意外にうまくいくんだとか、教え方や教える内容など語学教師としての成長のほかに、タイ人ってこんな考え方するんだとか、人間としての幅っていつのかな、考え方

が広がったりしたと思う。幅をもつことを覚えてって感じ。

Y: 幅とは?

M: なんでもありってことかな。日本にいた頃は、枠があっってはみ出すことが怖かったし、できなかったけど、海外では枠なんでもの自体なかったりするから。

Y: じゃ、日本に帰ってからは? 枠をはみ出すのは大丈夫になった?

M: もともと日本にも枠なんてなかったのかもって気づいた。自分で枠を作ってたかもね。

Y: どういう枠?

M: 教え方や教える内容にもっとも重点を置いて、これをこうやって教えなきゃいけないって決めてた。でも今は、まあこれもありかな、あれもありかなって。反応を楽しんだりもできるようになってきた。

Y: 何でもありでもさ、どこかに「ここまで」ってゆう線はあるでしょ?

M: でも、そんなに片意地張らなくてもいいんじゃないかって。それぐらい力を抜いていたほうが、学習者も安心するかなって。あんまりキチキチしすぎると、疲れちゃうかなって。楽しむことのほうが大切かなって。

Y: あ〜、確かに教える側が緊張してたら、習う側も緊張しちゃうよね

M: 頑張ってる教師って多いと思う。でも、そんなに頑張らなくても、ある程度、気を抜いて、時には寄り道したり、脱線したり、そんな幅があったほうが良いように思うようになった。特にタイだったからかもしれないけれど。

Y: タイだからってのは少しあるかもね。

M: 日本人って多くの人が真面目でしょ。私も。たぶん。でも、学習者の国はいろいろで、不真面目に楽しむ人もたくさんいるから、ある程度幅を持って、いろんなやり方や考え方を知らって大切だと思うの。学習者は計り知れないほどいろいろだから、そのいろいろに対応できる幅が要る。

Y: 教師自身の人間的な幅。

M: そう。人生経験や年齢を積み重ねるってことも大切なことだね。

ことばを学ぶ過程を通しての「アイデンティティの気づきとその変容」は、学習者だけに限られることなく、同時に教師にも起こりうることだと実体験から学んだ。それは、教師としての教える知識や技術だけにとどまらず、人間としての内面的な部分を成長させてくれるものだと考える。日本語教師として、5年目を迎えた私は今まで見えてこなかった自分を意識することが多くなった。日本で教えてい

でも、このようなことを感じるとは思うが、私の場合、特に海外での経験がそれを強く意識させた。

以前、日本で教えていた頃は、ことばを学ぶ過程で重要なことの上に「楽しむこと」はなかったように思う。上位を占めるものは、学習者の動機や目的や環境、教師の教授法や技術や知識などといったものだった。しかし、タイでは「楽しむこと」はかなり重要であり、時には「楽しくなければ意味が無い」場合すらあった。授業では、学習者は勿論、教師自身も楽しむことが第一であった。タイの人々にとって「楽しむこと」は学習に限ったことではなく、生活や仕事、人生そのものも「楽しむこと」を意味していたのだ。私はそのことに気づいた時、私の今までの日本語教育に対する姿勢について改めて考え直した。タイでの経験から私の中で「楽しむこと」の楽しさを知り、日本語教育への取り組み方が少しではあるが変化した、それも一つの「アイデンティティの気づき・変容」であると考えている。

4) 「アイデンティティの気づき・その変容」が言語習得過程に与える影響について

Y: レポートで、「アイデンティティの気づき・変容」が言語習得過程に与える影響を学問的に研究したいという思いが強くなった云々って書いてるでしょ。今現在はそのことについてどう考えてるの？

M: 気づいて変容することによって、言語習得はよい方向に進むんじゃないのかなって思ってる。

Y: それは、Mがタイ語を勉強してた時も思った？自分自身について新しく知ること、言語を習得していく上で何か役に立ったり、何か影響があったりした？

M: 学習過程で、自分がこんな小さなことにイラつくんだとか、こんな小さなことで誉められて気分がよくなるんだとか、自分自身について新しく知ったというより、意識した。

Y: たとえば、自分がこんな小さなことにイラつくんだとか、こんな小さなことで誉められて気分がよくなるんだとかって言われて、何か変わった？褒められるようにがんばるとか、小さいことにこだわらないようにしようとか。

M: 自分を意識したのと同時に、他の人を意識した。あの人は、こんな風にはできるけど、私は性格上あんな風にはできないな。と思っても、ちょっと真似してみるかって気持ちになったり。できるかどうかは別にして。私は石橋叩いてわたるタイプなんだけど、それじゃ言語習得はなかなか大変。自分自身のタイプに気づいて、なるべく失敗を恐れないようにしようとは努力してみ

るんだけど。でもやっぱりできないね。

Y: じゃ、そこで、「失敗を恐れないようにしようとは努力してみる」ようになったってのは、「アイデンティティの気づき」が言語習得過程に影響を与えてるってことだね。出来るかどうかは別にして。どちらでも言えるよね。「アイデンティティの気づき」が言語習得過程に影響を与えてるとも、言語習得過程が「アイデンティティの気づき」に影響を与えてるとも。

M: そうだね。どっちなんだろう??? どっちも?

Y との対話によって、「アイデンティティの気づき・変容」が言語習得過程に与える影響について考えるうえで、言語習得過程が「アイデンティティの気づき・変容」に与える影響についても考えなければならないことに気づいた。「アイデンティティの気づき・変容」は言語習得過程だけに起こるものではなく、様々な状況において起こりうる。言語習得過程は新しい自分に出会い、変わるための、一つの要素にしか過ぎないことも留意しなければならない。今後は「アイデンティティの気づき・変容」に影響を与えるその他の要素にも注目してみたい。

M: じゃ、Y は「アイデンティティの気づき・変容」が言語習得過程に影響を与えるって思う? 自分のタイ語の勉強の経験から。影響あった?

Y: アドリブは弱いなど(笑) 単語を使って、何か文章を作る練習ってのあったよね。パッと出てこないのね、文章が。それでアドリブよわっ、てのが分かって、なるべくあらかじめ考えるようになった。そういうのに気づけたってのはよかったと思うよ。

M: そういうのに気づくのと気づかないのって、言語の上達に関係あると思う?

Y: 自分のダメな所とかこうしたらいいんじゃないかってのが分かって、自分のやり方ってのが出来るわけじゃん。やっぱり自分のやり易いやり方ってのが、言語の上達にも効果的だろうから、関係はあると思う。気づいて、どうするか、だよな。

M: そうだね。それができていたらみんな苦労しないよね。

Y: それは、生徒が出来ないのか、先生がそうさせないのか、どっち?

M: どっちもあるんだろうね。

Y: 全ての学習者のニーズに答えるって、そりゃ出来ればいいけど、中々うまくいかないよね。タイでコンピュータ教えてた時なんかは、6割ぐらい分かってくればよかったって思ってたけど。

M: でも、学習者が自分で自分の問題や自分の良いところに、自分で気づくっ

て大切なんだと思う。教師が言うより、数倍効果もあると思う。その時は、時間かかっても、「自分で学習する力」っていうのかな、そんな力を養うのに多少時間かけても、後々、効果が上がってくると思うんだけど。その気づきを促す役割が教師だったりするんじゃない？

Y:「他人と過去は変えられない」からね。でもそれって大変だよな。

ことばを学ぶ過程で、自分というものを改めて意識し、現在の自分の抱える問題に向き合うことは容易ではない。たとえその問題を解決する方法が見つかったとしても、実際に学習者がその方法で解決できるとは限らないし、教師もさまざまな学習者に個別に対応していくことは難しいかもしれない。しかし、自分の学習を学習者自身が客観的にモニタリングし、学習をコントロールしていく、つまり「自分で学ぶ力」をもつことは大きな意味を持つと考える。他者との交流の中で自分のことばを学び、そして自分を表現していく力を養うことが大切なのではないだろうか。しかし「自分で学ぶ力」を獲得するためには、学習者の無限の潜在力と可能性を信じる、教師の強い信念も不可欠である。

3. 結論

「わたしにとって日本語教育とは何か」、もう一度振り出しに戻って考えてみたい。

最初の動機文の結論では、『わたしにとって日本語教育とは、「人と人との交流によって常に変化する新しい自分に出会う場である』』とした。今、メールでのやりとりや対話というインターアクションを終えたが、結論は基本的には変わっていない。対話というインターアクションを通して、更に認識を深めたといえるかもしれない。

しかし、結論は変わっていないが、対話を終えて、新たに見えてきたことがある。対話の流れによって、自分自身の考えそのものが変化したり、自分自身が言語化できていなかった無意識の部分を対話によって言語化しているということである。更に、相手のリアクションによって、私に変化する、変化しない部分があるということに気づいたのである。つまり、インターアクションを重ねるうちに、新しい自分の世界や、改めて知る自分の世界に出会ったのである。

私の場合、海外での経験を他者と共有することによって、意識・無意識の部分を掘り起こし、改めて自分の「アイデンティティ」観や動機について深く内省することができた。対話を進めることによって、自分の考えが整理されていったり、自分

では思いも寄らない言葉を発していることにも驚いた。そして、私の中で新たな概念や課題も生まれてきたのである。

具体的には、「アイデンティティの気づきと変容」についての対話から、「ことばを学ぶ過程」とは、机上の学習の過程だけではなく、実際の使用過程も含めた広い意味での学ぶ過程であるという新しい概念が私の中に生まれた。また、「アイデンティティの気づき・変容」は言語習得過程だけに起こるものではなく、様々な状況において起こりうることから、今後の研究においては、その他の要素にも注目してみなければならないことがわかった。

今回の対話を通して、今まで意識してこなかった他者との関係性のおもしろさを味わうことができた。人はこのようなレポートという特殊な状況下だけではなく、日々の他者との対話において、インターアクションを通して、同じような体験をしているのではないだろうか。私が日本語教育に携わる理由の一つに、対話で得られるこのような醍醐味を、学習者とのインターアクションにおいても得られることを期待しているということがあるのかもしれない。

「わたしにとって日本語教育とは何か」。それは、他者つまり学習者とのインターアクションを通して、お互いに新しい自分に出会う、つまり「アイデンティティ」を発見する場であると言い換えることができる。

私はこのレポートを作成過程において、「わたしにとって日本語教育とは何か」というよりも、「わたしとは何か」を考えていることに気づいた。つまり、日本語教育を通して、「アイデンティティ」を模索していたのだ。わたしの「アイデンティティ」の模索に終わりはない。終わりが無いからこそ、わたしにとって日本語教育の世界は魅力的なのである。

4. おわりに

4.1. 動機文をめぐるインターアクションから

動機文をメーリングリストに提出後、先輩方から様々なアドバイスやコメントをいただいた。そのアドバイスやコメントは、筆者である私以上に、深く読み込まれた問いが多く、時に私は困惑した。私が深く追求せずになにげなく使っていた言葉一つ一つに対しての鋭い問いは、その言葉に対する自分自身の認識を改めて問うものだった。例えば、動機文の中に多用した「アイデンティティ」「文化」「社会」といった言葉の概念をはっきりと明示できていないという指摘があった。

その理由を考えてみると、私の場合、それらの概念を言語化する作業の難しさにあるのではなく、そもそも私自身の頭の中でそういったことばの概念がまとまっていなかったことが大きいことを知った。

また、言語化する、言葉で表現する時には、伝えたい何かがなければできない、そんな簡単なことに今改めて気づかされた。私の伝えたい何かとは何か。そもそも伝えたいことはあるのか。そんな問いを自分自身になげかけるインターアクションだった。

4.2. 対話を終えて

対話の中で、具体的な話をするにより、それらの言葉の概念を自分自身で考えるきっかけが得られればという思いで対話を始めた。しかし対話を終えてみると、実際の対話で出てきた具体的な例と概念を結びつけることはなかなか難しかった。そもそも、このような対話形式は初めてだったため、対話の話題がいろいろと飛び、まとまりのない対話内容になってしまった。また、対話の形式も、対話相手が遠方に住んでいたため、チャットという形式で行った。本来ならば対面で対話を行うべきであろうが、対話を回数行えること、直接文字の記録が残ることなどの便利な点もあった。今回は対話相手に日本語教育関係者以外を選んだわけだが、今後機会があれば、日本語教育関係者とも対話を行ってみたいと考えている。

4.3. これから

今回のようなレポート作成は初めての経験で、戸惑うことも多かったが、大変有意義なものだった。特に対話という形式は新鮮で、今後の研究活動においても生かされるであろう経験だった。研究活動に入る前に、「わたしにとって日本語教育とは何か」という自分の寄ってたつ場所・スタンスを改めて考えることは今後の日本語教育への関わり方にも影響を及ぼすはずである。しかし、対話をしていても、レポートとしてまとめる作業をしていても、私はどうしても抽象的な言葉を使って表現しようとしてしまう傾向がある。しかし、抽象的な言葉では、他者に自分の思いは伝わらないのも事実である。大学院では、「自分の言葉」を獲得できるように、日々の他者とのインターアクションを大切に過ごしていきたいと思っている。